

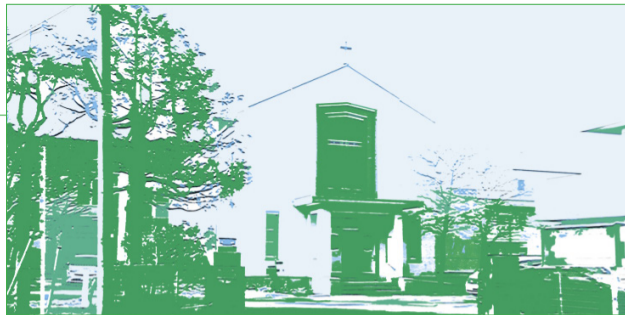


瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1

ミサの時間：月曜日～土曜日 6:20am（「朝の祈り」に続いて）
日曜日 7:00am、9:30am



日本 26 聖人と御復活祭

続橋 和弘 神父

皆さん、ご復活祭おめでとうございます。上記のテーマについて何か書くようにいわれましたので、また知ったふりして書かせていただきます。皆さんご存知のように、ここ瀬田の修道院には、立派な図書館がありますので、その資料をもとに書いてみます。

頂いたのは「二十六聖人と御復活」というテーマですが、「ご復活と二十六聖人」としても同じだと思いますので、まず、御復活についてから話を進めます。

キリシタン時代（一五四九年～一六一四年）の「ドチリナ・キリシタン」（カトリック教会の教え）の中に、「クレド」、つまり使徒信条についての簡単な解説がありますが、その中で次のようにあります。

「弟 三日目に甦り給ふとは何事ぞ？」

師 セスタヘリヤに御主ゼズキリシト死し給ふ時、貴き御アニマご色身を離れ給ひ、次のドミンゴに御アニマはみ棺に納められ給ふ御死骸に入り給ふを以て並びなきご威光を輝き甦り給ひ、数多のみ弟子に見へ給ふといへる事もこの箇条に現はるなり。」（※セスタヘリヤ＝金曜日 ゼズキリシト＝イエス・キリスト 色身＝肉体 アニマ＝靈魂）

現在の「カトリック教会のカテキズム」では、かなり長い説明文なので、これを要約したドン・ボスコ社発行の「カトリックの教え 改訂版」から引用します。

68 イエスの死後、どのようなことが起こりましたか。

死後三日目に、主イエスは死者のうちから復活しました。

72 イエスの復活はわたしたちにとっても重要な出来事ですか。

そうです。イエスの復活はわたしたちの救いに関して決定的な重要性を持っています。

「死者のうちから最初に生まれた方」（コロサイ 1・18）キリストは、この世ではわたしたちを罪から立

ち上げらせ、靈魂を義化することによって、また、のちの世ではわたしたちのからだを生かすことによ

て、わたしたちの復活の始まりとされました。」（69～71 は省きました）

このように、キリシタン時代の説明よりは少々長い説明となっていますが、とにかくキリストの復活がなければ、キリスト教は存在しませんし、二十六聖人も存在しません。ですから、日本にいられた宣教師達は、キリストの復活によって生かされ、派遣され、この復活を信じ、聖霊によって生かされ、派遣され、キリストの復活の証人となったのです。ですから、沢山の日本人が彼らの姿を見て洗礼を受け、自分たちもキリストの復活の証人となったのです。

イエズス会のルイス・フロイス神父が書いた「一五九六年度イエズス会日本報告書」（第一期第二巻 137頁 同朋社出版）に復活祭のことがでております。

「この布教に携わっていた二名の司祭たちの中の一人が、（レオ）がいた地で復活祭を祝った。この善良な老人（レオ）には非常な熱心さがあり、彼はいつかはその地全部が聖なるキリストに従うのを見ようとしきりに願っていた。彼は復活の祝日に、いっしょに祝うために四百人のキリシタンたちにすばらしい饗宴をした。彼は、七十歳になっていたにもかかわらず、第四番目でこれまでのよりずっと大きな教会を建てるために、非常な熱心さで材木や他の必要な資材を集めている。なぜなら彼が以前建てた、他の（三つの教会の）うち二つは、戦乱と豊後の国の劫掠の時に焼失し、かつ破壊されてしまったからである。」

以上のように沢山の信者が集まって、四旬節の務めを熱心に果たし、そして、復活祭を祝っていたのです。すごいです。なぜかといいますと、この年はあの二十六人が捕縛された年です。目立った教会活動が出来ない時だったからです。

一五六六年に秀吉による伴天連追放令があり、教会が破壊され、宣教も禁止された時代でした。フロイスの報告書を読みますと、とにかくいつ迫害が起こっても不思議でないくらい、キリスト教に危険が迫っていた時でした。教会に出入りすることも、まして洗礼を受けたりすることも、慎重でした。ですから、名のある人が洗礼を受けた時は、名を公表しませんでした。上記の復活祭に関する報告書にも、（レオ）とあるだけで、実名が書かれておりません。とにかく、当時大きな権力と勢力を持っていた坊さん達が目を光らせて、教会の活動を見張り、逐一秀吉に報告しておりました。秀吉自身はそれらを知っておりましたが、直接世を乱す訳ではなかったのかまわらないでいました。当時の坊さんたちは、加賀の一向一揆や比叡山焼き討ちなどにあるように、とにかく権力を振るっていた時代でした。

さて、とうとう大問題が勃発しました。それがサンフェリッペ号の土佐への漂着でした。その中には、宣教師もおり、沢山の武器が積まれておりました。

「やはり、キリスト教は、まず宣教師を派遣し、信者が増えたところで、本国から軍隊がやってきて、日本を奪う」という考えが日本にありましたので、それを裏付ける証拠と見做されました。実は、秀吉は船に積まれていた財宝（貿易の品々）に目が眩んだのも事実です。朝鮮戦争などで経済的に困窮していたからです。また、地震があり、浅間山の噴火による灰が降るなどの災害は、キリシタンの所為（しわざ）だなどと騒がれました。

ついに、キリシタン迫害の手が及んで、一五九六年十月に京都と大坂で二十四人のキリシタンが捕まりました。京都でフランシスコ会のペトロ・パプティスタ神父はじめ六名の会士十五名の日本人信徒、それに大坂でイエズス会の三木修道士と二名の信徒達計二十四名が、見せしめのために処刑されることになりました。十二月三十一日、長崎で磔刑に処すと公表され、翌年一月二日、片耳が削がれ、京都や大坂での引き回しがありました。これがカルワリオに向けての苦難の旅の始まりとなりました。長崎に向かう途中で、彼らを援助していた信徒二名が加わり、全部で二十六人となりました。

あとは、皆さんよくご存じの通りです。西日本を巡り、キリスト教禁止の宣伝を繰り返したのです。処刑の宣告文は次の通りです。フロイス神父は次のように書いておられます。

「これらの者どもは、フィリピンより使節として渡来したが、彼らは予が先年来厳しく禁止していたキリシタンの掟を布教するために都に滞在した。この理由によって予は、彼ら一同をキリシタンの掟を信奉した日本人たちともども死刑に処する。これによってこれら二十四名の者は、長崎において磔刑に処せられよう。予はさらに将来にわたって、この（キリシタン）宗門を禁止するゆえ、一同はこれを心得よ。また予はこれが実行されるよう命ずる。しかしもし予の布告に従わぬ者があれば、一族全部が（死罪の）仕置きを受くるものと覚悟せよ。慶長元年太陰十一月（二）十日」。

この宣告文は、彼らを満足させました。はっきりキリスト信者だからということで処刑されたことになったからでした。キリストと共に苦しみを受け、苦しみの後にはキリストの復活の栄光にも預かることができるという希望がありました。新しい命である天国が待ち受けていたのです。この復活の信仰があったからこそ、彼らは喜びのうちに苦しみをキリストと共にし、命を捧げることができたのです。それこそ、キリストに恩返しが出来たからでした。

皆さん、おめでとうございます。私たちも、毎日の生活の中に、キリストの死と復活の神秘を自覚し、喜びのうちに過ごすことができますように。